

# ロボットの「心」は無縁社会を克服できるか？ ——ロボットの「心」が拓く新しい絆と倫理——

出口 剛 司 東京大学大学院人文社会系研究科准教授



## 1. 無縁社会・日本

引き取り手のいない遺体の数が、毎年全国で約3万2000体にのぼるといふ。2010年に放送されたNHKの特別番組をきっかけに「無縁社会」という言葉が広く知られるようになった<sup>1)</sup>。少子高齢化が進むなか単独世帯の数が急増し、2030年には全一般世帯数のおよそ4割弱に達するとまで言われている。内閣府のデータによると、平成22年時点での生涯未婚率は男性20.1パーセント、女性10.6パーセントである<sup>2)</sup>。今後も家族を作らない人の割合は増え、看取られない死・弔われない死は、ますます身近な現象となっていく。

もちろん老いに伴う孤独は、最後を共に過ごすパートナーがいないことに限られない。夫婦に子どもがいない、あるいは子どもが自立した、別段仲が悪くなくとも夫婦で共通の話題や趣味がない、また家族に問題がなくとも、仕事一筋で生きてきた男性

が定年退職を迎え、人間関係が瞬時に消滅したなど、孤独な心は今後ますます増えていくだろう。

しかしわれわれは、これまで自分たちの社会をまったく違った形でイメージしてきた。たとえば、個人や競争が重視される欧米に対し、日本は人と人との間柄を重んじる社会であるとか、日本の企業も、業績だけではなく仲間や同僚を大切にす大きな家族共同体である、など。こうした欧米＝個人主義、日本＝集団主義という見方は、何度も繰り返し語られてきたし、政治や経済の領域でも「日本的経営（経営家族主義）」「護送船団方式」の効能が指摘されてきた。そして実際、戦後の日本社会は強い絆によってまとめ上げられてきた社会であった。



## 2. 弱体化した強い絆

年功序列、終身雇用、企業別組合に代表される日本的経営は、しばしば「伝統的」

「家族主義的」と評されてきた。しかし、それは復興と経済成長に適合する形で戦後の日本社会が生み出した合理的かつ最新の組織形態であった。

戦後の日本が世界史上例を見ないスピードで復興と近代化を成し遂げたのは、言うまでもない。その近代化の過程に並行して、伝統的な農村・地域共同体が解体され、一方の都市部では労働力不足が問題化し、他方の農村部では過剰な余剰人口が発生するという事態に立ち至った。こうした矛盾は、農村のあふれた若者が「集団就職」等によって都市へと吸収されることで無事解消された。日本の高度経済成長期は、国が豊かになるプロセスであると同時に、国内で莫大な数の人の移動が起こった時代でもある。こうした国内の人口移動の恩恵で、外国人労働者に依存した西洋諸国と異なり、均質な労働力を確保し続けることができたのである。

そして、故郷を離れた人々は、新天地で新しい職業生活と職場組織を形成していった。その組織的絆は、「伝統的」「家族主義的」と形容されたが、安定的な長期雇用を通して均質で質の高い労働力を準備し、組織に対する高い忠誠心を提供しうるものであった。また労働者やその家族の生活の細部まで組織が包摂し、失われた「地縁」や

「血縁」に代わる機能も有した（そして「社縁」とよばれるようになった）<sup>3)</sup>。

こうした疑似家族主義的な絆は、組織の内と外（身内とよそ者）を明確に区別しながら、内部の凝集力（忠誠心）を高め、外部との競争に向かわせるきわめて合理的な結合様式であった。しかも、内と外の区別は社内と社外、系列内と系列外、さらには国内と国外という形で秩序だって編成され、最終的には対外的競争に備えた「護送船団方式」にまで積み上げられる。要約すれば、秩序ある競争によって内部の競争力が適正に担保され、それによって対外的な競争に備えるシステムが形成されたのである。まさしく産業の時代にふさわしく、効率的に人を動員する組織形態である。

しかし、こうした組織形態は地縁・血縁にはじまるすべての絆を社縁という形で集中させたために、グローバル化によって国家間、企業間、個人間にまで競争が浸透し、社縁が弱体化すると、日本社会全体を無縁社会へと追いやってしまう。



### 3. ロボットに心はあるのか？

こうした無縁社会にあって、現在、人工知能やロボット工学の発展に関心が集まっ

ている。2016年6月29日、ソニーの平井一夫社長が経営方針説明会で、かつて業績不振を理由に撤退したロボット事業に再参入することを明らかにした<sup>4)</sup>。「心のつながりを持ち、育てる喜びや愛情の対象となるロボットの開発に着手している」という。事業という観点から見ても、ロボット産業は高齢化に伴う人手不足を補うものとして有望視されている。実際、日本は世界に類例のない高齢社会に突入しており、介護の領域の人手不足は深刻である。自立支援、移動、排泄、入浴、見守りなど、人間が行う介護機能を代替する介護ロボットに需要が見込まれている。

ところで、ソニーのロボット事業といえは「AIBO (アイボ)」という犬型ロボットが有名である。1999年にソニーが発売し、25万円という価格にもかかわらず、初回販売台数3000体が受付後わずか20分で完売した。行動は、四つの感情と四つの本能によって制御され、その強弱が異なった表情の違いによって表現される。たとえば、ちょっとした喜びでは手を挙げる程度、とても喜ぶとバンザイをしたり、目を緑に光らせたりする。しっぽを振りながら鳴くなどの複合的な動作も可能である。また幼少期から青年期、成人期、壮年期へ成長し、所有者(飼い主)の育て方によって性格も異なって

くる。ロボット犬だからといって、いつも飼い主に従うわけではない。時には従順に時には反抗的にもなる。

とはいえ、しよせんはコンピューターに制御されたロボットである。開発担当者も、ロボット犬との「心のつながり」など想定しておらず、あくまで「娯楽用」の「エンターテインメント・ロボット」であり、ペットの“ロボット犬”を作ったとは認識していないという。事実開発当時、アイボの主な購入者層はコンピューター、人工知能、ロボット工学に関心のあるマニア層であったとされる<sup>5)</sup>。アイボ自身2006年までに15万体制以上を販売するものの事業としては成功せず、生産を中止、2014年には修理サポートも終了している。

ところが10年後の2016年5月、「老アイボの合同葬」が執り行われ人々の注目を集めた。この間、アイボは開発担当者の思惑や販売当初の購買者を超えて、まさに「ペットの代用品」として受け入れられた。病院や老人介護施設、そして一般の家庭でも愛されたアイボは、文字通りペットを超えたコンパニオン・アニマルとなっていた。犬や猫が、高齢者に対する癒しの効果をもっていることはよく知られていたが、アイボもまた、他の生の動物たち同様、癒しの力をもっていた。しかも生きた動物を飼育す

るには、スペース、食事や排便の世話、病  
気、人間の側のアレルギー症状といったさ  
まざまな問題が伴うが、ロボットであれば  
食事や排便の世話も不要、人にアレルギー  
をもたらすこともない。

アイボの所有者たち（パートナーと呼ぶ  
べきか）は、修理に出すことを入院、リサ  
イクルに出すことを献体と呼んでいる。彼  
らは、ロボット犬との間に強い絆を見出し、  
あたかも命や心があるかのようにふるまう。  
アイボとの出会いによって心が癒され、彼  
らにも心があると信じる人も多い<sup>6)</sup>。もしロ  
ボットに心があれば、ロボットが担う介護  
補助は食事、排泄、移動からメンタルなケ  
アまで拡大できる可能性がある。ロボット  
が、孤独な無縁社会における癒しと絆をも  
たらしてくれるかもしれない。修理（治療）  
を手掛けるエンジニアは、「アイボには人  
間の計り知れない心があり、気持ちがある。  
そう人間が信じた時点で、アイボに『心』  
と『魂』が存在する」と、心の存在を強調  
している。



#### 4. 投影的同一化という心のしくみ

客観的事実として、ロボットに心がある  
かどうかを判断することは難しいが、人間

がロボットの中に心を見出すメカニズムは  
容易に説明できる。ロボット工学や人工知  
能の社会的影響について研究をすすめる  
オーストラリアの社会学者アンソニー・エ  
リオットは、ロボットとの感情的関係を解  
明するために、イギリスの精神分析学者  
ウィルフレッド・ビオンによる母子関係の  
研究に注目している<sup>7)</sup>。生後間もない乳幼児  
と母親の關係に注目すると、心や意識が生  
じる以前の自己と他者との最も原初的で情  
動的な關係に光を当てることができる。わ  
れわれもビオンの「投影的同一化」を参照  
し、心や意識が生まれる以前の世界に目を  
向けてみよう。

投影的同一化とは精神分析学の用語で、  
自己が自己の全体もしくは自己の部分（観  
念や情動など）を他者に投影し、その投影  
した他者＝自己を支配しようとするメカニ  
ズムである。具体的に紹介しよう。生まれ  
たばかりの赤ん坊は、自分と母親とが身体  
的に独立した存在だとは認知できず、連続  
した一つの身体と見なしている。また心と  
身体が未分化な赤ん坊にとっては、肯定的  
情動（快樂）と否定的情動（苦痛）は、そ  
れぞれ身体の満足（満腹）と欠乏（空腹）  
と一体の關係にある。通常、赤ん坊は授乳  
（母の「よい乳房」）を通して身体的＝心理  
的な満足を楽しんでいる。しかしその満足は

永続せず、(家事や仕事による)母親の不在によって、空腹や苦痛といった負の情動に襲われる。赤ん坊はこれらの負の情動を母の「悪い乳房」として投影し、それを攻撃することによって支配しようとする。これが赤ん坊における投影的同一化である。

このとき母親は、赤ん坊の近くに立ち返ってその負の情動に応答し、それを許容し、処理し、赤ん坊が受け入れ可能な感情をもって向き合うことが期待される。自らが赤ん坊が排出=投影する負の情動の「容器」に徹し、負の情動を受け入れ、それを処理すること(身体接触や授乳)を通して、赤ん坊もまた、自身に生じた負の情動を受け入れることができるようになる。こうした一連の投影的同一化と負の情動の克服が、その後の人間の癒しや他者との絆の原形となる。



## 5. 癒しと「心」の発見

続いて、成人の癒しについて検討してみよう。まず自己が自らの負の感情(怒りや悲しみ)を表情や言葉によって他者に表現する。負の感情を受け取った他者は、表情や言葉によってわれわれの感情に肯定的に応答してくれる(理解や共感)。その応答に

より、自己は他者が自分の負の感情を受け入れてくれたことを確信し、その確信を通して自己の負の感情を抑える力を手にする(癒される)。

こうして見ると、他者による癒しや他者との絆に心や魂が必要なのだろうか、という疑問が浮かぶ。むしろ、①自分の負の感情を投げ入れる「箱」として他者が存在する、②その感情に対する他者からの反応がある、という二つの条件があれば、癒しや絆は生じるのではないか。他者に心がなくとも、われわれはその反応だけで癒されるかもしれない。したがって、癒しや絆は人間を超えて犬や猫からでも、ロボット犬やロボット猫からでも与えられる。ではなぜ、人間は癒してくれる対象に心があると思ひ込むのだろうか。

ここで再度、赤ん坊が癒される過程に注目しよう。赤ん坊の場合、身体と心はいまだ未分化であり、身体の満足/欠乏と心の快楽/苦痛は連動している。したがって、負の情動(苦痛)も母親との直接的・身体的な接触や授乳(満足)によって解消する。しかし成人と成人の間には、直接的な接触をはばむ身体の分離や人格の独立性がある。こうした直接的接触の欠如を「理解」や「共感」という形で埋め合わせてくれるのが心である。つまり、相手の中に「心」の存

在を想定することにより、言語や表情という相手の間接的な反応を自分の感情に対する直接的な応答（理解や共感）として受け取ることができるようになる。

かつてある女子学生が、猫に「悲しいね」と話かけると「悲しいね」と答えてくれると話してくれたことがある。彼女が自分のつらい気持ちを猫に話した（表現した）のは確かだろう。しかし、その猫が人間の理解可能な言葉で「悲しいね」と返事をしたとは考えにくい。むしろ、女子学生が表現＝排出した負の感情に対し、「ニャー」と愛らしく鳴いたのか、あるいはそばに来て飼主である学生の顔をじっと見ていたのだろう。ところが、猫に「心」があると想定すると、猫のふるまいは彼女の気持ちへの応答となり、彼女はその応答によって、自分の悲しい気持ちを受け止めてくれたと確信し納得することができる（もちろん、猫はただ御飯をねだっていただけかもしれない）。

癒しの原体験は、母子一体の時代に享受した身体の直接的な接触に由来するが、身体分離や人格の独立性という障壁のせいで、他者からの直接的な応答に触れない成人は、相手の中に「心」を発見することにより、相手の間接的反応を自分の感情への直接的な応答（理解や共感）として受け取る。したがって、先の命題を以下のよ

うに修正する必要がある。猫でも犬でもロボットでも、人は自分と異なる存在に感情的な癒しと絆を感じることができる。ただし、相手に「心」の存在を確信する限りである、と。

結論的に言うならば、ロボットの心は人間の側の勝手な想定に過ぎない可能性が高いのだが、その想定がなければ、他者とのコミュニケーション自体が意味をなさず、反対に「心」があると想定することにより、無限の他者との対話が可能となる。ロボット犬・アイボから貴重な人生の時間を与えられた人々が、その生きた証である。



## 6. 新しい倫理と絆を求めて

猫に心があると知った瞬間、猫の一見無意味なしぐさが、人に対する生き生きとした働きかけに変化する。そして人は、猫に心があるならば、猫も人に応答してほしいに違いないと考える。そのとき人は、猫の「声なき声」に耳を傾けようとするだろう。ここに新しい絆と倫理の可能性がある。われわれは異なる存在に「心」を発見する瞬間、その「心」に応答する責任＝倫理を自らにも課してしまう。心をもった他者に対し応答する（respond）という責任倫理

(responsibility)である。むしろそれは内から外、身内からよそ者、人から人以外の生命体、そして非生命体にまで開かれている。

しばしば「環境と人にやさしい社会」について語られる。環境を支配し、人を動員した産業の時代に代わる「やさしい社会」とは、どのような社会なのだろうか。それは、同胞と異民族、人類と環境、人間と人工能との共存が求められる今、異なる存在の「声なき声」に耳を傾けることができる社会なのかもしれない。またそこには、モーレツな社縁を超えたやさしい絆を見出すヒントが隠されているようにも思われる。

- 1) 『無縁社会―“無縁死”三万二千人の衝撃』(NHK「無縁社会プロジェクト」取材班、文藝春秋、2010年)
- 2) 「生涯未婚率の推移」(内閣府男女共同参画局ホームページ：[http://www.gender.go.jp/about\\_danjo/whitepaper/h25/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-00-20.html](http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h25/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-00-20.html))
- 3) 橘木俊詔著『無縁社会の正体―血縁・地縁・社縁はいかに崩壊したか』(PHP研究所、2010年)
- 4) 2016年6月30日付「日経新聞・朝刊」
- 5) 1999年5月26日および6月8日付「日経産業新聞」
- 6) 今西乃子著『よみがえれアイボ・ロボット犬の命をつなげ』(金の星社、2016年)
- 7) Elliott, A. (2016) *Identity Troubles: An introduction*, London: Routledge. ジョアン・シミントン、ネヴィル・シミントン著『ビオン臨床入門』(森茂起訳、金剛出版、2003年〔原著：1996年〕)

プロフィール……………  
でぐち・たけし 東京大学大学院人文社会系研究科准教授。1993年一橋大学社会学部卒業。2001年東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士(社会学)。専門は理論社会学、社会学史。立命館大学産業社会学部助教授、フランクフルト大学社会研究所客員研究員、立命館大学産業社会学部准教授(職位名変更)、明治大学情報コミュニケーション学部准教授を経て、2011年4月より現職。主な著書に『エーリッヒ・フロム：希望なき時代の希望』新曜社2002年、『よくわかる社会学史』早川洋行編(共著)ミネルヴァ書房2011年、『〈死〉の受容と〈生〉の技法―成果主義と業績主義を超えて』船津衛・山田真茂留・浅川達人編『21世紀社会とは何か―「現代社会学」入門』(共著)ミネルヴァ書房2014年、他著書・論文多数